

# 文のアスペクト決定における 使役事象の役割

浅野 真也

## 1. はじめに

従来のアスペクト研究では、主に動詞の意味と、その動詞がとる内項の役割に重点が置かれてきた。一方で、外項のかかわり方や使役事象のアスペクトについても僅かながら議論が見られ、使役事象のアスペクトにおいて、引き起こされる変化に先立つ使役行為が、全体のアスペクトに含まれる現象が観察されてきた。しかし、使役事象において、使役行為の及ぶ範囲が、引き起こされる変化事象のアスペクトの反映を左右する現象については、触れられたことがないと思われる。

本稿では、語彙的な使役動詞の外項が担う使役的性質が、文全体のアスペクトに及ぼしうる影響の仕方として、少なくとも2つのパターンが存在することを主張する。まず、第2節では、使役事象の中でも、ある変化を引き起こすために、変化前に行われる準備としての使役的行為が、使役事象全体のアスペクトの一部に組み込まれるものを見る。この種の使役事象のアスペクトは、使役の及ぶ範囲である時間と、変化が起こる時間（あるいは状態が保たれる時間）との結合（和集合、union）から成ると考えることで説明される。

次に、第3節では、変化が起こっている時間のうち、使役主のコントロール性が及ぶ範囲のみが、事象全体のアスペクトを形成する使役事象を見る。第4節では、使役主のコントロールが及ぶ状態の部分のみが、使役事象全体のアスペクトに反映される現象を見る。これらの事象のアスペクトの決定には、使

役行為と変化の時間的な共通部分（積集合，**intersection**）が反映していることを提案する。第5節では、行為と変化の時間的な共通部分によるAspect形成のパターンが、従来広く観察されてきている、準備としての使役行為が使役事象全体のAspectに加わらないケースも説明できることを述べる。

## 2. 準備としての使役行為のAspect的反映

具体的な議論に入る前に、本稿で用いる使役の概念について触れておく。典型的には、観察される行為 **p** と、ある変化の発生（または、ある状態の継続）**q** について、話者が **q** でない状況 ( $\neg q$ ) を想定した場合に、行為 **p** も起こっていない ( $\neg p$ ) と考えることが妥当であるときに、**p** が **q** を使役したと認定される (McCawley 1976) <sup>(1)(2)</sup>。使役とは、ある物体の変化の発生や状態の継続について、そうでないようにできた存在が認識されたときに、認められる概念である。

本節では、使役がAspectに関わる現象として、ある物体の位置や状態の変化をもたらすために、変化前に行われる行為が、使役事象全体のAspectの一部に含まれるものを考察する。このことを見るため、本節では主に、主語名詞句が指示する物体の変化を表す自動詞と、同じ変化の使役を表す他動詞との間で自他交替するペアの、時間幅 (**durativity**) の有無を見てみることにする。

その前に、事象の時間幅の有無を判断する方法を明らかにしなければならない。日本語の場合、事象の時間幅は、局面動詞「始める」の共起可能性を用いて確かめられる (金田一 1976, 森山 1988, 浅野 2005)。継続的な活動を表す、あるいはそのような活動を含む事象 (1) は「始める」と共起できるのに対し、瞬間的な変化を表す事象文 (2) は「始める」と共起できない。

- (1) a. 雨が降り始めた。
- b. 加奈が走り始めた。
- c. その生徒が、巨大なポスターを壁に貼り始めた。

(2) a. \*健二が駅に着き始めた。

b. \*その虫が死に始めた。

(2) で用いられる動詞でも、変化するものが複数である場合は、複数回の瞬間的な変化がある時間幅にわたって起こると解釈できる。その解釈では、(2) の動詞が、「始める」と共起できるようになる（「生徒たちが駅に着き始めた」, 「虫たちが死に始めた」）。本稿では、単体の一回の変化に関わる事象の解釈での「始める」との共起性を、事象の時間幅の有無のテストとして用いる。

では、本節のトピックについて見てみよう。言語が表す使役事象では、使役行為のアスペクト具現も多く観察される。たとえば、(3)–(7) の他交替のペアでは、自動詞が瞬時的な事象を表すのに対し、対応する他動詞は時間幅のある事象を表すものである。

(3) a. \*その実が枝から落ち始めた。

b. 隆がその実を枝から落とし始めた。(→ 実はまだ落ちていない)

(4) a. \*その木が植わり始めた。

b. 真理子がその木を植え始めた。(→ 木はまだ植わっていない)

(5) a. \*その花瓶が壊れ始めた。

b. 明がその花瓶を壊し始めた。(→ 花瓶はまだ壊れていない)

(6) a. \*花子の父親が起き始めた。

b. 花子が、自分の父親を起こし始めた。

(7) a. \*その家が建ち始めた。

b. 大工がその家を建て始めた。(→ 家はまだ建っていない)

(3)–(7) の (a) の文で表される自動詞の変化自体は、瞬時的に起こるものとして概念化されている。この性質は、表される変化を意味の一部に含む他動詞が表す文 (b) にも当てはまるはずである<sup>(3)</sup>。そうすると、(b) の文が時間幅の有る事象を表すのは、瞬時的な変化とは別の意味が、事象全体の時間に寄与していることになる。(b) の文が、変化結果が起こっていないことを含意し、使役行為の起点を表していることから、変化に先行する行為が、全体を時間幅のある使役事象としているのがわかる。

(3)–(7) の **b** 文のように、変化前になされる使役行為の起点を指せる使役事象があることは、日本語の使役動詞が変化を含意しない傾向にある(池上 1980–1981) ことに関わっているとはいええない。現に、(3)–(7) のような振る舞いを見せる動詞の中にも、変化結果を含意するものがある。

(8) \*大工がその家を建てたけれど、その家はまだ建っていない。

また、結果を含意する英語の動詞でも、同様のことが言える。英語の使役動詞は、その多くがある時点での結果による完了までの過程を意味するため、進行相がその使役の完了を含意しない。むしろ、その使役が完了していないことが含意される (Kenny 1963, Dowty 1979)。この現象は、未完了の逆説 (*imperfective paradox*) と呼ばれ、(9) のような推論パターンを起こす。

(9) *John is building a chair.* (→ *John has not built a chair*)

未完了の逆説は、進行相によって取り立てられる局面が、ある事象の完了までの継続的過程であることを示す。そして、その準備期間ともいべき過程が、アスペクト表示に存在する事象に、こうした現象が起こると考えられる。

ちなみに、(3)–(7) の使役事象では、もたらされる変化結果の時点も、そのアスペクトの中に組み込まれている。そのことは、これらが「時間量+」の時間句と共起できることからわかる。

(10) 隆が、30分でその実を落とした。

(11) 大工が、3ヶ月でその家を建てた。

「時間量+」の時間句は、ある時点から事象内の終結点までの時間を述べるものであるため、事象のアスペクトに何らかの区切りの時点が必要とする (影山 1996)。このように、(3)–(7) の使役事象では、もたらされる変化と、それまでの継続的な使役過程とが、両方とも全体のアスペクトに存在する。

これは、先ほど見たような英語の使役動詞でも同様である。達成事象は、*almost* との共起において曖昧性を見せる (Dowty 1979)。

(12) *John almost built a chair.*

(12) は、変化結果の発生に至る直前であるという解釈のほかに、行為の起点に至るところであったという解釈もある。後者の解釈は、まさに変化前の準備

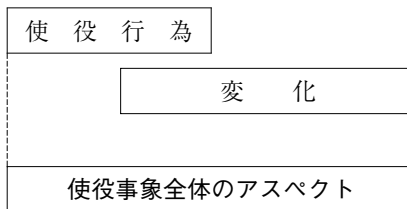
行為としての使役行為が、Aspect上存在していることを示している。そして、前者の解釈から、変化の時点もまた、事象のAspectに組み込まれていることがわかる。そのことは、変化までの時間を *in*-時間句で表せる点からもわかる。

(13) **John built a chair in 4 hours.**

日本語の「～で」と同様に、この *in*-時間句も事象の時間的終結点を必要とするものである (Vendler 1967, Dowty 1979)。このように、もたらされる変化の時点と、それまでの使役的な準備行為の両方が、使役事象のAspectに顕現している現象は、決して日本語固有のものでなく、使役を表す動詞のAspect構造において、一般的に関わってくる可能性があるといえる。

これまででも、使役事象はある変化とそれを引き起こす行為との2つの部分事象が、使役関係で結ばれるものとして分析されている (影山 (1996) による、語彙概念構造の分析など)。本稿では、本節で扱った使役事象は、2つの部分事象の時間的な結合部分 (**union**) から、そのAspectが決定されるものと分析する。

(14) 使役行為と変化の部分事象の結合部分によるAspect決定



(14) は、本稿が提案するAspectの形成パターンの一つとして、使役行為と変化の部分事象のどちらか (あるいは両方) がまたがる時間を、使役事象全体のAspectとして見なすものを示している。本節で見た例は、変化の部分事象が瞬時的なものであった。これらは、変化の部分事象が使役行為に包括される形で存在し、使役行為の終結として変化の部分事象がある構図を考えれば、(14) の形成パターンで捉えられる。

ただし、使役事象のアスペクト具現は、本節で見たパターンに限られない。次節では、コントロールの及ぶ変化の部分のみが、使役事象全体のアスペクトとして認められるという、これまでの研究で扱われてこなかった現象を見る。

### 3. 使役事象における、変化の部分事象のアスペクト的反映

前節で見た例は、使役事象が含む変化の部分事象を元に、それを引き起こすための行為が変化と独立して全体のアスペクトに含まれるものであった。本節では、引き起こされる位置変化や状態変化に関わる時間の全体が、使役事象全体のアスペクトに反映されないケースを見る。

まずは、(15)の例を見てみよう。

(15) a. \*隆が、そのボールを (20 m) 投げ始めた。

b. \*加奈が、そのボールを (丘の上まで) 蹴り始めた。

(15)に挙げた例は、単体(ボール)の一回の移動を引き起こす使役の起点を表す意には解釈できない。しかし、(15)で用いられている動詞は、使役される移動の経路を意味構造に持つと考えられる。以下の例を見られたい。

(16) a. 隆が、そのボールを 20 m 投げた。

b. 加奈が、そのボールを丘の上まで蹴った。

距離を表す数量詞や「まで」経路句の共起は、継続的な移動が意味できる動詞とのみ共起する(浅野 2005)。継続的な移動を意味しない動詞は、こうした句と共起できない。

(17) a. \*明が、そのボールを {20 m/丘の上まで} 叩いた。

b. \*隆が、そのボールを {20 m/丘の上まで} 殴った。

このことから、(15)の動詞は、引き起こされる移動の経路を意味構造に含んでいるのに、時間幅を持つ事象としては捉えられていないと考えるのが妥当である。では、(15)の動詞では、なぜ移動の起点のみが、使役事象全体のアスペクトとして認められているのであろうか。ここで、(15)のような使役移動において、使役主が関わるのはその起点だけであることに注目したい。こう

した使役は、移動の最初にのみ力を加え、その後の継続的な移動には関与しないものであり、Talmy (1985) のオンセット使役 (onset causation) に当たる。(15) の例では、オンセット使役により使役主が関わる時間 (移動の起点) だけが、使役事象全体のアスペクトとして認められていると捉えられる。

現に、移動の局面全体のうち、全体のアスペクトとして反映されるには、使役の及ぶ範囲に限られる動詞が他にも存在する。たとえば、「転がす」という動詞は、(18 a,c) に見られるように、距離数量詞や「まで」経路句と共に共起でき、継続的な移動を意味するといえる。そして、(18 b) で示されているように、使役主が移動の最中も力を加えるような意味では、使役行為が継続的な時間をもって行われると見なされる。しかし、(18 d) に見られるように、一押しで単体を転がす意味では、使役行為全体が継続的な時間にわたるとは見なされない。

- (18) a. 真理子はその岩を {300 m/下まで} 転がした。  
 b. 真理子はその岩を (下まで) 転がし始めた。  
 c. 真理子が、一押しでその岩を {300 m/下まで} 転がした<sup>(4)</sup>。  
 d. \*真理子が、一押しでその岩を (下まで) 転がし始めた。

このような使役事象のアスペクトでは、使役主のコントロールが、変化の部分のどの範囲まで及んでいるかが問題となっている。

同様に、「飛ばす」という動詞も、風に乗せて紙飛行機を飛ばすケース (19 a) と、ラジコンを飛ばすケース (19 b) とで違いがある。

- (19) a. \*加奈が、丘の上からその紙飛行機を飛ばし始めた<sup>(5)</sup>。  
 b. 真理子が、丘の上からそのラジコンを飛ばし始めた。

(19 a) は、移動中の紙飛行機へのコントロール性を持たないオンセット使役の例であり、時間幅のない事象として捉えられている。よって、(19 a) は、単体の一回の変化を引き起こす使役事象の起点としては、解釈できない。一方、(19 b) では、飛行中のラジコンを使役主は常にコントロールしており、事象全体も継時間幅を持っていることがわかる。

使役の及ぶ範囲のみが使役事象全体のアスペクトとなる例は、使役移動に限

られない。(20), (21) の例では, 単体の状態変化を引き起こす使役での, コントロール性の及ぶ範囲とAspectとの相関性が表れている。

- (20) a. 明が, 一押しでその扉を閉めた。  
 b. \*明が, 一押しでその扉を閉め始めた。  
 c. 明が, 少しずつその扉を閉め始めた。
- (21) a. 隆が, 一掻きでその砂山を崩した。  
 b. \*隆が, 一掻きでその砂山を崩し始めた。  
 c. 隆が, ゆっくりとその砂山を崩し始めた。

たとえば, (20b) では, 最初に一押ししたときの力だけで, ゆっくり扉が閉まるように使役したとしても非文法的である。また, (21b) も, 最初の一掻きだけ力を加え, 後は砂山がゆっくり崩れてしまった状況であっても, 非文となる。しかし, (20), (21) で用いられた動詞は, (c) で示されるように, 本質的に継続的なAspectを持たないのではない。これらの動詞も, あくまで変化の最初だけ関わる使役行為のときのみ, 瞬時的なAspectとなるのである。

意味構造にあると思われる部分が, Aspectに反映されていないことについて, 影山 (1996) では意味構造上の「際立ち」の概念を用いて説明している。たとえば, 一般的な使役は達成 (accomplishments) (Vendler 1967) を表すが, その語彙概念構造として, 影山 (1996) では (22) のスキーマを想定している。

(22) [x ACT(ON y)]CONTROL[y BECOME[y BE AT z]]

(22) の構造では, 述語 CONTROL の左側が, ある使役主 x が y に何らかの働きかけを行うことを表しており, その行為が述語 CONTROL の右側に表されるような y の変化を左右するという使役のスキーマを表している。ただし, Aspectに反映するのは, (22) の構造全体とは限らず, 影山 (1996) では, 構造内の述語 (ACT, MOVE, BECOME, BE) のいずれかが焦点化されることによるAspect具現を提案している。

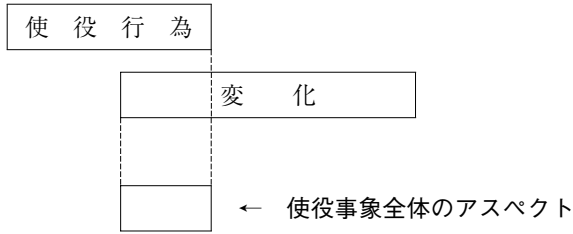
では, 本節で扱っているような, コントロールの及ぶ範囲が, 使役事象全体



のアスペクトを決定する現象についても、意味構造のある部分だけが際立っていると考えてよいであろうか。少なくとも、(22)のような語彙概念構造に示されている部分事象のいずれかが際立ちを持つという分析では不十分である。もし(15)、(18)–(21)で表される事象のアスペクトが、行為の部分事象(述語 ACT (ON)を含む事象)のみが焦点化されたものによると考えるならば、アスペクトに反映されていない準備行為は、少なくともその部分事象には含まれないことになる。たとえば、「投げる」という動詞では、投げられる物体を持ってから、ふりかぶり、力を込めて手から離すまでの過程が、アスペクトの焦点化を受ける行為の部分(ACT)から除外されていると考えなければいけない。この考えによると、前節で見たような、準備行為がアスペクトに反映される事象では、行為(ACT)の中に準備行為が含まれ、そうでないような例((15)、(18)–(21))では、準備行為が行為(ACT)から除外されることになる。このように、語彙概念構造の焦点化の考え方をを用いると、準備行為の意味的な位置づけの違い(ACTに含まれるか、含まれないかの違い)として、両者の相違を捉えることになる。

もしくは、行為(ACT)のより詳細な構造を提示し、ある瞬間的な部分だけを取り立てられるようにすることで、本稿での問題を分析できるかもしれない。しかし、注意しなければならないのは、上で見た例で、取り立てられている使役行為の瞬時的な一部分は、任意に選ばれるものではないという点である。(15)、(18)–(21)では、使役行為の中でも、特に変化の起点と時間的に重なる部分だけがアスペクトに反映されている。このことに着目し、ここで問題となっている現象が、意味構造上の部分事象(行為 ACT)の焦点化によるものではなく、使役行為と引き起こされる変化との時間的な共通部分(intersection)が、使役事象全体のアスペクトとして認められているものとする。このアスペクト決定のパターンは、(23)のように図示される。

(23) 使役行為と変化の部分事象の共通部分によるアスペクト決定



(23) は、前節に見たような、準備行為が使役事象のAspectに含まれる場合とは逆の操作による、Aspect決定である。前節で見た例は、変化が発生する前の準備としての使役行為が、使役事象全体のAspectの一部として認定されているものであった。それに対し、本節で見ている例については、(23) に示したように、使役行為と変化の両方が時間的に共有する部分が、全体の使役事象全体のAspectを決定するものと考えられる。たとえば、「投げる」という動詞ならば、移動と使役行為の時間的共通部分である、移動の起点のみが使役事象全体の非継続的（瞬時的）なAspectとなっている。

また、(23) によってAspectを決定する使役事象には、次のことが伴う。

(24) 使役事象が準備行為をAspect表示には含まず、また全体のAspectに含まれる変化の部分には、使役主のコントロール性が関わっている。

(23) のメカニズムによりAspectが決定された使役事象では、行為と変化の時間的共通部分から除外される、変化までの準備行為がAspectに反映されないことが予測される。少なくとも、本節で見ている例については、この予測は正しい。(15)–(21) の使役事象における準備としての使役行為が、少なくとも文のAspectから常に捨象されている。なぜなら、(18b), (19b), (21c), (22c) のように、「始める」が付くことのできる文脈を考えた場合、とられる解釈は必ず変化の開始以降の事象の起点となるからである。

本節で見た例は、使役行為と変化の時間的な共通部分のみが、Aspect構造に反映される場合を浮き彫りにしている。これは、行為、あるいは変化の部

分事象の焦点化に伴うアスペクト表示の考えとは異なり、双方の相互作用の一つのあり方として、使役事象のアスペクトを捉える考え方である。

次節では、使役事象全体のアスペクトに、使役主のコントロールが必要とされる他の現象を見てみることによって、(23)のようなアスペクト決定の実在性を支持することにする。

#### 4. 状態の制御としての使役事象とアスペクト

前節では、変化を引き起こすような使役事象において、コントロールの及ぶ範囲が全体のアスペクト構造に関わる現象を見た。コントロールの対象は変化に限られず、第2節で見た使役の概念には、あるものの状態の継続を制御するような事象も当てはまる。そして、状態の制御を表す事象の中にも、前節で見た現象と同様のものが見られる。

たとえば、(25)のような例を見てみよう。

(25) 車を一時間車庫に入れた。(影山 1996: 57)

ここでは、車を入れた後の状態が一時間にわたって、使役主によって制御された解釈がとられる。

次に挙げた例でも、同様のことが言える。

(26) **Mary opened the door for 3 hours.**

(27) **The wind opened the door for 3 hours.**

(26)–(27)では、ドアが開いた状態が3時間続いたという解釈となる。ただし、その解釈を出すには、主語の指示体である使役主が、3時間にわたってドアの状態を制御している必要がある。たとえば、(26)では、**Mary** がドアを手で押さえるか、電動ドアならば遠くからコントロールするか、あるいは閉まらないように注意するなどして、ドアが開いている状態の継続に関わっている必要がある。このいずれの場合でも、**Mary** は、第2節で述べた使役の概念に当てはまるようなコントロール性を持っている。

特に、使役主が無生物ならば、使役行為がドアの状態に直接的に関わる必要

性が出てくる。(27)では、風の力でドアが開き、風が止んでしまうことなく、そのドアの開いた状態が継続することに、3時間にわたって関わっている必要がある。やはり、この解釈でも、ドアが開いた状態へのコントロール性を、使役主（風）が持っている。

このように、状態だけがAspect的に顕現していると考えより、使役により制御された状態の部分が文全体のAspectとなっていると考えるのが妥当である。変化と状態の違いはあるものの、本節で取り扱ったケースにも、前節の(23)で提案したAspectの形成が当てはまる。つまり、(25)–(27)では、状態だけがAspect的に焦点化されるのではなく、状態をコントロールする事象として、制御と状態の時間的共通部分のみが、全体のAspectとして認められていると考えられるのである。

## 5. 準備行為が文のAspectに含まれない使役

もし、使役行為と変化の共通部分のみを反映するような、(23)のAspect決定があるとすると、変化の部分事象のみがAspectに反映していると一見思われるような使役事象も統一的に説明できる。たとえば、もたらされる変化に先立って行われると考えられる準備行為が、使役事象全体のAspectに反映されないものが多く存在する。

- (28) a. \*その凶悪犯が捕まり始めた。  
b. \*警察官が、その凶悪犯を捕まえ始めた。
- (29) a. \*その手紙が真理子の家に届き始めた。  
b. \*隆が、その手紙を真理子の家に届け始めた。
- (30) a. \*的にそのボールが当たり始めた。  
b. \*明が的にそのボールを当て始めた。
- (31) a. \*的が外れ始めた。  
b. \*的を外し始めた。

これらの使役動詞は、対する (a) の自動詞とAspect的には同じと考えら

れる。

このような、変化が起こり始めてからの期間のみが、使役事象全体のAspectとして認められる使役は、言語現象に広く、また規則的に見られる。中国語では、動作を表す動詞に「在」を付けることで、その動作の最中を焦点化できる。しかし、同じ動詞に結果補語を付けることで使役を表す複合語は、Aspect的に瞬間性を表す動詞と同じ振る舞いを示す。たとえば、以下の例 (Tai 1984: 292) を見てみよう<sup>(6)</sup>。(32 a) で用いられている動詞「学」‘勉強する’は継続的な活動を表すため、「在」によってその最中を焦点化できる。しかし、何か訓練の結果できるようになった状態を表す「会」を付けた (32 b) では、その習得までの過程を焦点化できなくなる。

(32) a. 我在学中文。(私は中国語を勉強しています)

b. \*我在学会中文。(私は中国語を習得しています)

また、このような「動作動詞+結果補語」の複合語（他に「找到」‘見つける’、「画成」‘描く’）は、「着」による焦点化もできず、瞬時的な事象と同じ振る舞いを示す (馬 1981, 楊 2001)。筆者の調査でも、動作動詞単独よりも、結果補語を合わせた複合語の方が、「着」との共起が不自然であるという結果が出た。

(33) a. ?我学着中文。(私は中国語を勉強しています)

b. ??我学会着中文。(私は中国語を習得しています)

こうしたことから、中国語の「動作動詞+結果補語」の複合語が、Aspect的には瞬間性を表すといえる<sup>(7)</sup>。さらに、英語の *almost* に当たる語（「几乎」‘ほとんど’）を用いても曖昧性が無いことも、結果までの行為がAspectに反映されていないことを示している (Tai 1984)。

また、英語において、心理的变化を引き起こす使役を表す動詞は、たとえ意図的動作主 (*agent*) が主語でも、変化までの行為がAspectに反映されない (Van Voorst 1992)。ここでは、*amuse* 「楽しませる」という動詞を見てみよう。

(34) John is amusing me. (→ John has amused me.)

**(35) John almost amused me.**

(34), (35) のような心理動詞の振る舞いは、第 2 節で見たような、一般的な英語の使役動詞の性質と全く性質を異にする。まず、(34) に見られるように、使役の心理動詞では、進行相が変化の発生を含意する。これは、変化の発生以降のみが、*amuse* が表す使役事象のアスペクトとして認められているからである。また、(35) で、*almost* が多義性を見せず、必ず変化の発生の直前のみを表すのも、変化までの行為がアスペクト的に捨象されていることを示している。

このような使役動詞について、単に引き起こされる変化だけを、全体のアスペクトに反映しているものと考えられるかもしれない<sup>(8)</sup>。しかし、一方で、(28)–(35) の現象を、第 3 節、第 4 節のものと同様に、使役行為と変化の部分事象がまたがる時間幅の共通部分の反映 ((23) のメカニズム) と捉えることもできる。なぜなら、(23) のメカニズムによりアスペクト具現された使役事象は、アスペクトに反映する変化の部分が、使役主のコントロールの及ぶ範囲である ((24) を参照) が、このことは、(28)–(35) の例について当てはまるからである。

たとえば、英語の動詞 *amuse* ((34)–(35)) は、経験者が楽しみ始めた時だけでなく、楽しんでいる間はずっと、使役主が何らかの形でその経験者に関わらなければならない。これは、行為と変化の共通部分によるアスペクト具現の分析が予測する通りである。また、上に挙げた日本語や中国語の例では、瞬時的な変化が含まれるが、使役主はその変化をコントロールできる立場にある。現に、上に挙げた日本語の例に対応する命令文も容認される<sup>(9)</sup>。

**(36) a. その凶悪犯を捕まえろ！**

**b. その手紙を真理子の家に届けろ！**

このことは、本節で見た使役事象においてもたらされる何らかの変化や事態の発生自体が、使役主によってコントロールされるものであることを示している。

## 6. まとめ

本稿では、使役事象のアスペクトとして、使役行為と変化の結合部分 (**union**) をとるものと、共通部分 (**intersection**) をとるものとの2つのパターンが存在することを提案した。そして、特に後者のパターンは、状態の制御や、一見変化の部分のみが全体のアスペクトに反映していると思われる現象なども、統一的に説明できるものであることを主張した。

### 注

\* 本稿の作成において、ご指導、ご示唆を頂いた影山太郎先生に、この場を借りて感謝の意を表したい。そして、用例のチェックをお願いした **Donna Tatsuki** 先生、関西学院大学大学院の院生・学部生の方々にも、心からお礼申し上げたい。言うまでもなく、本稿の内容における不備や誤りは全て筆者の責任である。

- (1) 物理世界においては、ある行為 **p** とある変化（あるいは状態）**q** とが、それぞれ関係をもちつつ起こるが、これらが使役関係と認定されるのは、そう位置づける認識者によってのみである。
- (2) **Lewis (1973)** による反実仮想の概念を用いた使役の分析では、ある行為 **p** を行わなければ、ある変化 **p** が起きなかったと想定することが妥当な時に **p** が **q** を使役することを認めるものであったが、**Kim (1973)** や **McCawley (1976)** により批判されている。本稿の使役の概念は、**McCawley (1976)** に拠るが、これは **Talmy (2000)** の使役概念にも通じるものである。
- (3) **Rothstein (2004)** は、継続的な時間を含む事象構造 (**accomplishment event structure**) は、変化の部分事象 (**BECOME event**) も漸次的に、継続的な時間をかけておこるものとして分析している。しかし、(3)–(7) のような例を見る限り、**Rothstein** の分析は全ての継続的な **accomplishments**、特に使役事象には当てはまらないといえる。
- (4) 筆者の調査した中には、「転がす」という動詞を、使役主が転がる物体と同伴して移動することを意味すると認識しているために、(18c) を非文とする話者もいた。本論では、(18c) を容認する話者が、(18d) を非文法的と判断する現象を問題にしている。
- (5) 筆者の調査では、(19a) の例を容認する話者もいた。(19a) を容認する話者は、

「飛ばす」という動詞のアスペクト形成において、使役行為と物体の移動との時間的な結合 (**union**) を形成するパターンのみとして語彙化されていると考えられる。なお、本稿は、使役行為と変化との共通部分 (**intersection**) で時間構造を形成するパターンの存在を主張するものである。よって、単体の一回の移動の解釈で (19 a) を非容認的とする話者が、(19 b) を文法的と判断することが重要である。

- (6) (32) では、**Tai (1984)** の例を漢字にして示してある。  
 (7) これに対応すると思われる日本語の結果構文では、結果述語によって行為の時間構造が使役から除かれることはないようである。

(i) その靴をピカピカに磨き始めた。

(ii) その着物を青色に染め始めた。

また、英語の結果構文についても、**Horrocks & Stavrou (2003: 305 fn. 12)** が進行相の用法が可能なことを指摘しており (e.g. *s/he was beating the metal flat when . . .*)、最終的な結果に至る前の段階も事象の時間構造の一部として認められる。

- (8) **Shibatani (1973)** では、特に統語的使役構文において、引き起こされる変化事象だけが使役事象全体の起こる期間と見なされる解釈が見られることを指摘している。しかし、**Dowty (1979: 191 fn. 17)** では、語彙的使役動詞が表す事象の期間として解釈される一つの可能性としても、この考えを適用している。

- (9) 第2節の使役の概念に当てはまるものの中で、否定命令のみが可能な使役がある。これは、起こった変化について、それを防げた立場にあった人が防止行為を怠るものであり、いわば責任を持つ人を使役主とみなすものである (影山 1996, 西村 1998, **Pardeshi 2002** の議論も参考)。こうした使役には、具体的な行為が無いので、当然起きた変化の前を「始める」で取り立てることはできない。それに類する英語の *have* 使役も同様に、使役行為自体を進行相で焦点化することはできない (**McCawley 1976**)。

(i) a. \*真理子の財布が無くなり始めた。

b. \*真理子が自分の財布を無くし始めた。

(ii) a. 隆が体調を崩し始めた。(→ 隆の体調が変化している)

b. 加奈は、明からもらった植物を枯らし始めていた。(→ 植物が枯れ始めている)

(iii) \*When I entered the room, John was having Mary kiss him.  
 (**McCawley 1976: 120**)

これらは、使役変化に先立つ準備行為が存在しないため、本稿が提案する (14), (23) のどちらのメカニズムによっても、変化の起点以降のアスペクトが実現する。よって、この種類の使役事象は、本論の主張には特に関わらない。



## 参照文献

- 浅野真也. 2005. 「移動事象の経路と時間の構造」. *KLS* 25: 151–161.
- Dowty, David R. 1979. *Word meaning and montague grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Horrocks, Geoffrey and Melita Stavrou. 2003. Actions and their results in Greek and English: The complementarity of morphologically encoded (viewpoint) aspect and syntactic resultative predication. *Journal of Semantics* 20: 297–327.
- 池上嘉彦. 1980–1981. ‘Activity’–‘Accomplishment’–‘Achievement’–動詞意味構造の類型一. 『英語青年』80年12月号–81年3月号.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』東京: くろしお出版.
- Kenny, Anthony. 1963. *Actions, emotions, and will*. New York: Humanities Press.
- Kim, Jaegwon. 1973. Causes and counterfactuals. *The Journal of Philosophy* 70: 570–572.
- 金田一春彦. 1976. 『日本語動詞のアスペクト』. 東京: むぎ書房.
- Lewis, David. 1973. Causation. *The Journal of Philosophy* 70: 556–567.
- 馬 慶株. 1981. 「時量賓語と動詞的類」. 『中国語文』1981年第2期. (干康・森宏子訳「時間量を表す目的語と動詞の種類」. 干康・張勤(編). 『テンスとアスペクト I』, 39–66. 東京: 好文出版.)
- McCawley, James D. 1976. Remarks on what can cause what. *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*. ed. Masayoshi Shibatani, 117–128. New York: Academic Press.
- 森山卓郎. 1988. 『日本語動詞述語文の研究』. 東京: 明治書院.
- 西村義樹. 1998. 「行為者と使役構文」. 中右実(編)『構文と事象構造』, 107–203. 東京: 研究社出版.
- Pardeshi, Prashant. 2002. “Responsible” Japanese vs. “Intentional” Indic: A cognitive contrast of non-intentional events. 『世界の日本語教育』12: 123–144.
- Rothstein, Susan. 2004. *Structuring events: A study in the semantics of lexical aspect*. Cambridge, Mass: Blackwell.
- Shibatani, Masayoshi. 1973. *A linguistic study of causative constructions*. Ph.D. University of California, Berkeley.
- Tai, James H-Y. 1984. Verbs and times in Chinese: Vendler’s four categories. *Papers from the Parasession of Lexical Semantics*. ed. D. Testen et al. 289–296. Chicago: Chicago Linguistic Society.

- Talmy, Leonard. 1985. Force dynamics in language and thought. *CLS* 21 : 293–337.
- Van Voorst, Jan. 1992. The aspectual semantics of psychological verbs. *Linguistics and Philosophy* 15 : 65–92.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY : Cornell University Press.
- 楊 凱榮. 2001. 「中国語の“了”について」. つくば言語文化フォーラム (編). 『「た」の言語学』, 61–95. 東京 : ひつじ書房.